

松任谷正隆の

# 僕のひとりごと

27

## VOL.27 能古島での出来事

---

前回の続きを書こうかどうしようか迷ったのだけれど、ごく少数ながら賛同を得られたので書くことにする。

悲惨な和製ウッドストック野外コンサートの続き。たぶん70年頃の出来事だ。

酔っ払いだらけの楽屋という名のプレハブから追い出された僕は、

仕方なくヤブ蚊が飛び交うプレハブの外に寝場所を探し、暗闇の中、少しだけフラットな地べたに横になった。

ほっとため息をつこうとしたら、何か生温かいものを背中に感じた。と同時に覚えのある香りがプーン、と。

うっ・・・これは・・・。どうしてこういう時にこうなるの？僕は泣きそうである。

着替えも持ってきてないし、仕方なしに水道を探し、上半身裸になって泣きながらシャツを洗う。

ああ夏で良かった。冬だったらきっと死んでいるに違いない。これが多分午前1時くらい。

出番は2時とされているから、僕は上半身裸のまま、ロック野郎と化してステージに上がるのだろうか。

とはいえ、ずいぶんスケジュールは押しているようだ。

相変わらず音は盛大なのに、客なんて殆どいやしない。出演者達のリハーサルごっこのようだ。

スケジュールは押しに押し、結局僕たちの出番は6時頃になり、ようやくステージに上がることが出来た。

10人くらいの客が眠そうに拍手をする。押したおかげでシャツもなんとか着ることが出来た。

ところが、である。ステージの上にピアノがない。

そこにあるのは僕が触ったこともないエレクトーンが一台だけ。

えっ？これ、どうやったら音が出るの？

そこから先はどうやって演奏し終えたか覚えていない。

僕の記憶回路が抹殺を命じたのだと思う。

ともかく全てが終わり、呆然としながら、帰りはどうなるのか、

それだけを考えながら山の中腹に座って待っていると、

午前8時くらいになって日差しがどんどん強くなってきた。辛い。

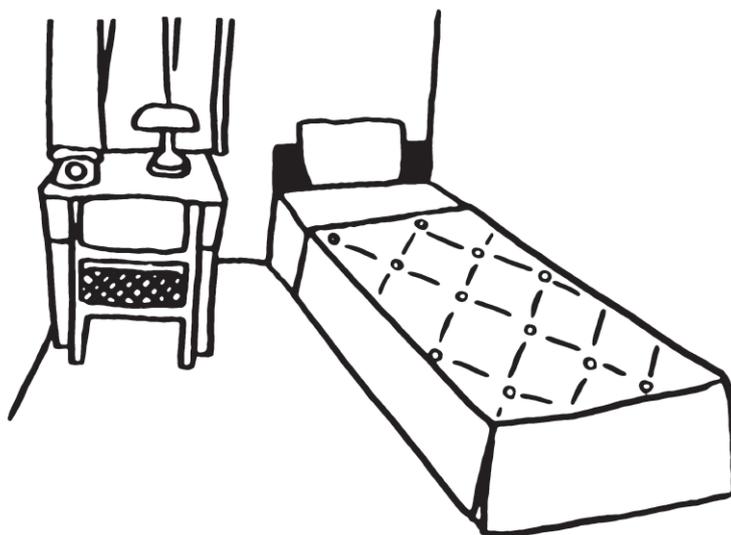
このままでは日射病になる(熱中症という言葉は当時なかったと思う)。



音と音の合間には家畜運搬用のトラックに乗せられた新たな出演者達が登ってくる音が聞こえる。  
どうやらトラックは夜中中、そして朝も出演者達をピストン輸送しているらしい。  
同僚事務所のバンド「はっぴいえんど」たちが、疲れ果てた顔をしながら輸送されてきた。  
ご愁傷様である。どんなステージだか見たらびっくりするぞ。  
結局、僕たちは彼らの演奏が終わるまで待って、一緒に飛行機で帰るということだった。  
地獄のような一夜、もちろん一睡も出来ていない。  
福岡空港に辿り着く頃には全員顔面蒼白。吐きそうである。  
藁をも掴む思いで薬局で胃薬とビタミン剤を買う。薬の効くことと言ったら・・・。  
僕はこれをきっかけに旅に薬が手放せなくなった。もちろん、今でもだ。

話はもうちょっとだけ続く。  
台風の影響で福岡空港はごった返し、顔面蒼白な僕たちの座れる椅子などなく、仕方なくまたしても地べただ。  
1時間待ったか2時間待ったか。結局飛ばない、ということになり、近くのビジネスホテルへ。

これほどビジネスホテルという名が  
神々しく聞こえたことはなかった。  
ようやく寝られるのである。しかもベッドで。  
当然のことに一番安い部屋。  
ドアを開けるとすぐベッド。3畳くらいだろうか。  
窓なし。昼なのに真っ暗。信じられないような狭い  
シャワーとトイレだけのユニット。しかし、  
こんな素敵な部屋はない、と本気で思った。  
うん、あのときのあの部屋は、  
都内の一泊ウン十万の部屋よりも数倍、  
いや数十倍素敵だった。



### 松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。